

精神障害当事者が参加する授業の成果

—授業終了後の学生のレポートから—

中谷千尋* 森川三郎* 野澤由美* 渥美一恵**

要旨

看護基礎教育において、精神障害当事者が授業に参加する取り組みは、看護学生が対象理解を深める上でその成果が大きいことが報告されてきている^{1)~5)}。本研究は、本学において平成14年度から実施している当事者参加授業について、その成果と課題について検討するものである。研究方法は、当事者参加授業後の学生のレポートを分析対象として、課題である「当事者の人間的尊厳（人権）の回復と自律に向けた活動」について¹⁾、「考えが深まったり広がったりしたことの内容」を見ること²⁾その内容を活用して、「学習の成果を期待する4側面」として「知識の側面」、「技術の側面」、「感情の側面」、「価値観の側面」の学びの特徴を明らかにすることである。

その結果、学生の考えが深まったり広がったりした内容は、「エンパワメント」に関するものが49%、「当事者の自律」が29%、「支援者側の理解」が22%であった。また、学習の成果を期待する4側面からは、「感情の側面」の学びが最も多く61%、次いで「知識の側面」が24%、「価値観の側面」が12%、「技術の側面」が4%の順であった。このことから、学生は「当事者の自律」に向けた活動と「支援者側の理解」が深まることが重要であり、その基盤には相互に信頼し尊敬する気持ちが存在することが不可欠であることを学んだと推察できる。通常の授業では限界がある「エンパワメント」が生じる体験ができたことの意義は大きい。また、「学習の成果を期待する4側面」のうち、「感情の側面」が6割を占めており、豊かな感じ方が出来ていることが示され、精神障害者観を培っていく上での効果も大きい。「技術の側面」の記述は少なかったが、この後学習する精神臨床看護論の講義及び臨地実習のなかで、更に学びが深められることが期待できる。

キーワード：当事者参加授業 エンパワメント 学習成果が期待される4側面

I. はじめに

さまざまな生活困難を抱えながら地域で暮らしている精神障害当事者（以下、当事者）が、セルフヘルプグループにおいて、立場を同じくする人たちと自らの病気や生活の体験を語り合うことは、経験と力を分かち合うことによって希望が持てるようになり、自律と社会参加の促進に向けての力強い活動となっている⁶⁾。更に、講演会や大学等の授業のような公の場面においても、当事者が自らの内的世界を語り、参加者との意見交換をするという活動も大きな広がりを持って注目されてきている^{7)~9)}。このような活動は、当事者に

としては長年、心の中に閉じ込めてきた気持ちを解き放ち、自尊心を取り戻すと同時にさまざまな刺激を受け、社会生活を送る上でのスキルを高める上で大きな意義があると考えられている。一方、看護学生ら参加者にとっては、当事者と出合い直接話しを聞くことによって、イメージが一新し、“当事者の視点”に立って理解を深める機会になる。そして、援助するという他人に向かうことが、同時に自らにも向かうことに気づき、援助は対等性、双方向であることを学び、援助者である自分が当事者に力づけられることさえ実感する。このような体験は、誰もが相互信頼の元に自分らしい

所属：*本学 精神看護学

**本学 非常勤助手

生き生きとした生活を送るためのノーマライゼーションの考えを具現化する第一歩であると考え。『『べてるの家』山梨講演会』においても講演会に参加した当事者、家族、保健医療福祉関係者、看護学生らが大きな影響を受けたことを報告した^{10)～13)}。

看護学生は、精神看護の重要な役割の一つに、当事者への理解を深め、偏見や誤解のない社会で、当事者がQOLを高められるような生活を支援する働きがあることを学んでいる。また、看護実践に当たっては、“対象者の立場”に立って感じ、考えることが基本であると認識しており、そのためには、自らがしっかりと精神障害者観を持てるようになりたいという気持ちを強めている。しかし、実際の場面では、どのように援助したらよいのかと戸惑うことの多いのが現状である。このような状況から本学では、平成14年度より精神看護学概論の授業に当事者が参加する機会（以下、当事者参加授業）を設けている。

当事者参加授業については、池邊らの「精神障害者の体験談を取り入れた授業からの学び」¹⁴⁾、川岸らの「精神分裂病の入院体験から学ぶ看護～当事者の語りを通して～」¹⁵⁾、加藤らのアルコール依存症者の「自助グループ・当事者参加による授業の効果についての報告」¹⁶⁾、米澤らの「教師と自助グループ・当事者の摂食障害の授業での学生の学びとニーズの実態」¹⁷⁾、及び本学による「精神障害当事者とともに創る授業の効果」¹⁸⁾などがある。いずれも当事者から直接話を聞いた後の学生のレポートを分析し、その学びを明らかにしたものであり、教師による説話や当事者・家族の手記、ビデオ、ロールプレイなどを用いた授業方法では限界のある「生きた学び」ができたことが報告されている。

本研究は、当事者参加授業に参加した学生の学びについて授業後のレポートを分析し、1)「考えが深まったり広がったりした内容」及び2)「学習の成果を期待する4側面」から、その成果を明らかにすることを目的とした。このことは、今後、精神看護学のより効果的な授業のあり方について検討するためにも役立つことである。

Ⅱ. 研究方法

1. 授業の実施

1) 当事者参加授業の概要

精神看護学概論は、「人間の精神機能の理解を基盤に、健全な心の発達とそれに影響を及ぼす要因及び精神の危機的状況について理解すること。また、精神保健福祉活動の概要を理解し、看護の役割・機能について学ぶ」ことを目的に、1単位（30時間）で展開している。その内の2時間を当事者参加授業にあて、「当事者活動・セルフヘルプグループ」として、“対象者の視点”に立って理解を深め、看護の役割・機能についての学びを深めることをねらいにしている。この授業に先駆け、特に関連性の深い内容の講義として「対象理解と看護活動」を4時間、「精神看護と倫理」を2時間、「精神保健福祉活動における看護の役割」を6時間実施している。学生には、初回、授業のコースアウトラインの説明時及び直前の授業の時に当事者参加授業を実施することの説明をしている。

2) 本授業の参加者

- ・学生：Y大学短期大学部2年生90名
- ・当事者：3名（Y病院デイケアメンバー《統合失調症でY病院に入院し、退院後地域で暮らしながらデイケアに通っている男性1名、女性2名》）
- ・本学精神看護学担当の教員 3名
- ・Y病院デイケアスタッフ2名（医師1名 看護師1名）

3) 本授業の展開

- (1) 導入（当事者参加授業の進め方と当事者の紹介）
- (2) 他己紹介（全員がペアになり、5分間に互いの相手についての情報収集を行う。その後、当事者とペアを組んだ組を含む6組が全員の前で相手について紹介する）
- (3) 3人の当事者による体験談（1人概ね15分）
- (4) 質疑応答・意見交換
- (5) まとめ

2、研究方法

- 1) 対象：当事者参加授業に出席した2年生90名
- 2) 調査時期：平成14年7月23日（授業終了後）～7月30日までの1週間。
- 3) 調査方法・内容：当事者参加授業終了後のレポートを分析する。課題は「当事者の人間的尊厳（人権）の回復と自律に向けた活動について」考えが深まったり広がったりしたことを、A4版用紙1枚に自由記載する。提出は提出用ボックスに各自が投函する。
- 4) 分析方法：学生のレポートに記載された内容を、意味ある最小の文を1として数えカード化した。なお、一人の学生が同じ意味の内容を何回記述しても1と数えた。その後、(1)カードの類似するものをまとめてサブカテゴリとし、さらにカテゴリへと記載された内容の意味することを帰納的に抽出した。(2)、(1)と同じデータを用いて学習の成果を見る4側面から分類してみた。分類の視点は、キャスリンB、ゲイバーソンらの「看護実践教育に期待される学習の成果の側面」¹⁹⁾の考え方を参考に、研究者らがA「知識の側面」、B「技術の側面」、C「感情の側面」、D「価値観の側面」の4つの側面を設定した。
- 5) 信頼性を確保するための手続き：記述内容の分類及び解釈については4人の研究者間で検討し、データに対する信頼性を確保するように努めた。
- 6) 倫理的配慮

- (1) 学生に対して：授業中に、当事者参加授業後のレポート提出について口頭で説明し賛同を得た。提出は各自で指定されたボックス内に投函する方法をとり、成績には関係しないことを付け加えた。
- (2) 当事者に対して：Y病院のデイケア室の掲示板に本講義があることを紹介し、当事者から参加希望を募った。希望のあった3名の当事者に対しては、事前に授業の趣旨と内容の詳細を説明し、承諾するかどうかは自由意志であることを伝え、口頭で承諾が得られた。また授業の後に学生の学びをアンケート調査をし、研究としてまとめることについても同時に口頭で承諾を得た。調査後、結果をデイケア室に持参して対象者に報告した。なお、当事者への対応については、Y病院の医師と看護師の協力を得た。

Ⅲ. 用語の説明

・当事者参加授業

精神障害当事者が看護学生の授業に参加し、自分自身の病気や日常の体験について語り、学生との意見交換をする授業方法であり、ここでは、看護学生が、“当事者の視点”からの理解を深め、看護の役割・機能を学ぶことをねらいとしている。

・エンパワーメント

人間の持つ潜在能力を重視し、個人が健康生活をコントロールする力、成長する力、自己決

表1 「学習の成果を期待する4側面」の分類及びその例

4側面	各側面の分類の視点	例
A＝「知識の側面」	・特定の事実や情報を知ること ・理論をいかに実践に生かすか知ること	・グループホームやデイケア、訪問看護、ヘルパーサービスなどによって生活が自律できるように社会の中で精神障害者に対するサポートシステムが形成されていることが分かった。
B＝「技術の側面」	・人間関係の技術 ・精神運動性の技術 ・チームで協働する技術	・精神障害者の言葉を傾聴し、言葉の奥にある意味を理解すること、共感すること、それはとても難しいが、看護師の重要な援助である。
C＝「感情の側面」	・新たな刺激を受けて生ずる感動、快、不快、喜び、悲しみなどの気持ち、感じ方 ・感動する ・励まされる ・恥ずかしい	・将来の夢を持ち、それに向かってできる限り自律した生活ができるように努力していることを聴いて感動した。 ・心が広い人ばかりで、自分もっと自分らしい生き方がしたいとパワーをもらった。
D＝「価値観の側面」	・精神障害者のとらえかた ・看護に対する考え ・生き方に対する考え	・精神障害者というレッテルを貼らずに、人と人として向かい合っていくことがその人に対して敬意を示すことであり、お互いの信頼関係が深められる。

表 2 「学びの内容」と「学習成果を期待する」4 側面の分類

カテゴリー	サブカテゴリー	カード数	学習の成果を期待する4 側面			
			知識	技術	感情	価値観
Ⅰ 当事者の自律 (134) 29.2%	(1) 病気を受け入れ自律している	53	30	0	19	4
	(2) 内的世界を語ることの意義は大きい	41	10	3	23	5
	(3) 目標や夢があり生き生きしている	40	8	0	22	10
Ⅱ 支援者側の理解 (100) 21.8%	(4) サポートシステムの必要性	44	35	0	3	6
	(5) 精神疾患・障害の理解	34	9	0	24	1
	(6) 当事者への偏見をなくす	22	7	2	5	8
Ⅲ エンパワーマインド (225) 49.0%	(7) 生きた学び	89	0	0	89	0
	(8) 自分の当事者へのイメージの変化	49	2	0	37	10
	(9) 看護師の姿勢のあり方	44	8	7	20	9
	(10) 当事者から励まされた	27	0	0	27	20
	(11) デイケアスタッフからの学び	16	0	4	12	10
計		459	109 (24%)	16 (3%)	281 (61%)	53 (12%)

定力などを開発していく過程を意味している。看護学生は、当事者参加授業において感動したり、励まされたりして当事者に尊敬の念を抱き、相互に信頼しあう気持ちが生じてくるのを実感しており、このような感じ方や体験は看護学を学び、看護観を深めていく上で貴重なことである。

・ 学習成果が期待される 4 側面

看護実践教育の成果として生じてくる『学習の成果の 4 つの側面と』して、A = 「知識の側面」、B = 「技術の側面」、C = 「感情の側面」、D = 「価値観の側面」の 4 つの側面がある。

Ⅳ. 結果

レポートは 89 名の学生から回収（回収率 99%）でき、459 枚のカードに分割できた。意味内容の類似性に基づき分類した結果、課題である「当事者の人間的尊厳（人権）の回復と自律に向けた活動について「考えが深まったり広がったりしたこと」については、11 のサブカテゴリーを抽出した。そこから更に共通する内容の性質に着目した結果、共通する 3 つのカテゴリーが見出された。（以下、文中の「」内はカテゴリー、『』内はサブカテゴリー、《》内はカードの内容を表す）

1、課題に対して考えが深まったり広がったりした内容

3 つのカテゴリーを見てみると、Ⅰ「当事者自身の自律」が 134 枚（29%）、Ⅱ「支援者側の理解」が 100 枚（22%）、Ⅲ「エンパワーマインド」が 225 枚（49%）であった。

1) カテゴリーⅠ「当事者自身の自律」について

134 枚のカードが該当し、3 つのサブカテゴリーが抽出できた。最も多かったのは(4)『当事者が自分の病気を理解し受け入れ自立している』の 53 枚であった。その内容を見てみると、《当事者が自分の病気を否定せず、冷静に理解して暮らしている》、《障害を自分の一部として受け入れ、病氣と仲良く付き

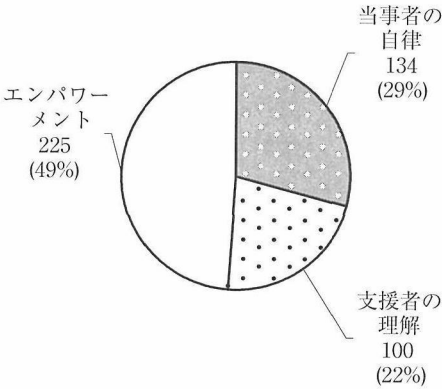


図 1 「学びが深まったり広がったりした内容」カテゴリー別カード数と割合 n = 459

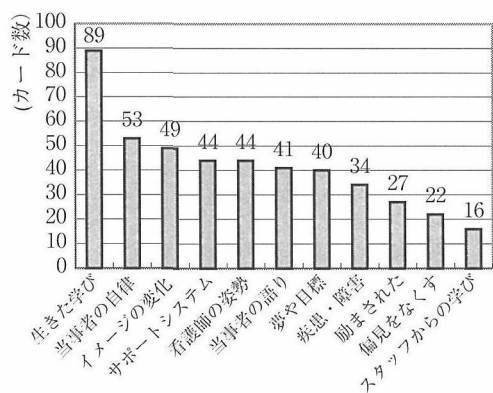


図2 「学びの内容：サブカテゴリー」
n = 459

合っている》、《一人暮らしをしている男性が、ヘルパーさんに手伝ってもらうようになってから、自分でも部屋をきれいにし、食事を作るようになったと聞き、自律のあり方が分かった》などである。

次に多かったのは(2)当事者が『内的世界を語ることの意義は大きい』の41枚である。

《当事者の話はかなり衝撃的であったが、個人的なことを伝えてくれたことで理解が深まった》、《話すことによって当事者はコミュニケーションが上手くなり、看護師は当事者の思いを理解出来るようになる》などである。3番目は(3)『当事者は目標や夢があり生き生きしている』の40枚である。《将来は精神障害者のホームヘルパーになり、ピアサポートをするのが夢だといっはつらつとしていた》、《将来はサッカーチームを作る夢があり、貯金もしていると言っていた》などがあった。

2) カテゴリーⅡ「支援者側の理解」について

100枚のカードが該当し、3つのサブカテゴリーが抽出できた。最も多かったのは(4)『サポートシステムの必要性』の44枚である。内容を見てみると《個人にあった生活が出来るようにホームヘルパーや看護師は支援していく必要がある》、《サービスの制度が整うことで、長期入院が避けられ自分の生活リズムが整えられる》、《入退院を繰り返しても自律への活動が行えるのはサポートシステムがあるからだ》などがあった。次に(5)『精神疾患・障害の理解』については、《本当に誰かに操られている感じがするということがわかった》、《幻覚や妄想が当事者にとってどんなものか、またどんなに嫌なものかが聞けた》、(6)『当事者への偏見をなくす』では、《専門職の人の中にも偏見があり、それをなくさなければ当事者の人権の回復には繋がらない》、《精神障害の知識がないと人間的尊厳はなく残虐な扱いを受ける》、《社会の誤解や偏見をなくすことが当事者の人権の回復に繋がる》などであった。

3) カテゴリーⅢ「エンパワーメント」について

225枚のカードが該当し、5つのサブカテゴリーが抽出できた。まず、(7)『生きた学び』については、98枚があり学生全員が記述している。《講義では想像の域を出ないことが、実際の話しを聞いて生きた授業として考えが深められた》、《実際に経験した人にしか言えない内容で説得力があった》、《直接話しを聞

表3－1 「学びが深まったり広がったりした内容」： カテゴリーⅠ「当事者の自律」 カード数 134枚

サブカテゴリー	記述内容の抜粋
(1) 自分の病気を受け入れ自律している 53 枚	・ 当事者が自分の病気を否定せず、冷静に理解し前向きに受け入れている ・ 障害を自分の一部として受け入れ、病気と仲良く付き合っている ・ 1人暮らしをしている男性が、ヘルパーに手伝ってもらうようになってから自分でも部屋をきれいにし、食事を作るようになったと聞き、自律のあり方が分かった ・ 幻覚や妄想を受け止め、自分の病気としっかり向き合っている
(2) 当事者が内的世界を語ることの意義は大きい 41 枚	・ 当事者の話は、かなり衝撃的であったが、個人的なことを伝えてくれたことで理解が深まった ・ 話すことで当事者はコミュニケーションが上手くなり、看護師は当事者の思いを理解できるようになる ・ 大勢の前で緊張したと思うが、はなすことできっと楽になり自分を深める機会になったと思う ・ ノーマライゼーションは、当事者からの歩み寄り和社会の考えを変えることが必要だと分かった ・ 自分の人権について主張することこそ自律への第一歩である
(3) 目標や夢があり生き生きしている 40 枚	・ 将来は精神障害者のホームヘルパーになり、ピアサポートをするのが夢だといっはつらつとしていた ・ 自分の夢ややりたいことを実現させるために勉強して努力をしている ・ 将来はサッカーチームを作る夢があり、貯金もしているといっはつらつとしていた以上に社会での活躍をして大きな夢を持っている ・ 当事者の表情や態度を見ると、今を精一杯生きていくという意欲にあふれている

表 3－2 「学びが深まったり広がったりした内容」： カテゴリーⅡ「支援者側の理解」 カード数 100枚

サブカテゴリー	記述内容の抜粋
(4) サポートシステムの必要性 44 枚	・ 個人にあった生活ができるように、ホームヘルパーや看護師は支援していくことが必要である ・ サービス制度が整うことで、長期入院が避けられ自分の生活リズムが整えられる ・ 入退院を繰り返しても自律への活動が行えるのはサポートシステムがあるからだ ・ 当事者が 1 人暮らしが出来ることを知り、地域のサポート体制、国からの資金援助が必要と考えた
(5) 精神疾患・障害の理解 34 枚	・ 幻覚や妄想が当事者にとってどんなものか、またどんなに嫌なものか分かった ・ 症状も発病の仕方も様々で苦労したことがよく分かった ・ 幻聴があり操られているという感じが実感でき、職場に出たとき困ることが多いのだと感じた ・ 精神疾患がこのように回復するということが分かった
(6) 当事者への偏見をなくす	・ 専門職の人の中にも偏見があり、それをなくさなければ当事者の人権の回復にはつながらない ・ 社会の人々に、精神障害の知識がないと当事者の人権の尊厳はなく残虐な扱いを受けることになる ・ 精神障害者というレッテルを貼らずに人として向かい合っていくことが必要 ・ 精神障害者は“できない人”ではなく周りが“させない”のだと感じた

き、これまでの授業では聞き逃していたことが、実は大切なことなのだと認識できた》などがあった。次は、(8)『自分自身の当事者へのイメージの変化』では、《当事者は自律した生活や考え方をしていることが勉強になり、精神障害者への考えが一新した》、《何をされるか分からないという恐怖心を持ち、そのような人は病院に入っていた方がよいと考え違いをしていた自分が恥ずかしい》、《社会の偏見や誤解の厳しいなかで病氣と戦っている当事者は、自分たちより強い人だという考えに変わった》などである。(9)『看護師の姿勢のありかた』については、《看護師の大きな役割に、精神障害者を受け入れる社会や環境を作ることがある》、《病氣をよく知り、一方的に守るのではなく、当事者とも協力し合って何が援助になるのかを考えてい

きたい》、《その人が私たちに何を伝えたいのか、緊張しないでどうやって伝えることができるのか、もっと勉強したい》、などであった。(10)『当事者から励まされた』では《生きることに非常に前向きで、聞いている自分の方が励まされた》、《心が広い人たちばかりで、自分ももっと自分らしい生き方がしたいというパワーをもらった》、《自分は看護師の道を歩むことに迷いがあったが当事者の姿勢に励まされて踏みとどまることが出来た》などであった。(11)『デイケアスタッフからの学び』は《当事者の話を聞くとき、その話が現実とかけ離れていたり、質問と答えが違ったりしても、それを受け入れて話を進めていた》、《精神障害者が自律できるまでのスタッフの支えのすごさが伝わってきた》、《当事者の目を見て、誠心誠意心を込めて質問したり話

表 3－3 「学びが深まったり広がったりした内容」： カテゴリーⅢ「エンパワーメント」 カード数 225枚

サブカテゴリー	記述内容の抜粋
(7) 生きた学び 89 枚	・ 講義では想像の域を出ないことが実際の話しを聞いて生きた授業として考えが深められた ・ 実際に経験した人にしか言えない内容で説得力があった ・ 直接話を聞き、これまでの授業の時とは聞き逃していたことが実は大切なことなのだと認識できた ・ 講義やテキスト、ビデオでは感じられない感覚が得られ、当事者を身近に感じ精神看護が見えてきた
(8) 自分の当事者へのイメージの変化 49 枚	・ 当事者は自律した生活や考え方をしていることが勉強になり、精神障害者への考えが一新した ・ 何をされるか分からないという恐怖感を持ち、そのような人は精神病院に入っていたほうがよいと考えていた自分が恥ずかしい ・ 社会の誤解や偏見が厳しい中で、病氣と戦っている当事者は自分たちより強い人だという考えに変わった ・ 今まで知らず知らずのうちに健常者とは違うと感じていた自分に気づきはっとさせられた
(9) 看護師の姿勢のあり方 44 枚	・ 看護師の大きな役割に、精神障害者を受け入れる社会や環境を作ることがある ・ 患者－看護師という関係にとらわれず人として向き合えるように努力したい ・ その人が本当は何を伝えたいのか、緊張しないでどうやって伝えることができるのか、もっと勉強したい ・ 患者の言葉を傾聴し、共感することは難しいが、それを実行できるように学習を積む
(10) 当事者から励まされた	・ 生きることに非常に前向きで、聞いている自分のほうが励まされた ・ 心が広い人ばかりで、自分ももっと自分らしい生き方がしたいというパワーをもらった ・ 当事者は生きることに前向きで、自分は看護師の道を歩むことに迷いがあったが、励まされて踏みとどまることができ、尊敬の気持ちが湧いた
(11) デイケアスタッフからの学び 16 枚	・ 当事者の話を聞くとき、その話が現実とかけ離れていたり、質問と答えが違ったりしても、それを受け止め話を進めていた ・ 精神障害者が自律できるまでのスタッフの支えのすごさが伝わってきた ・ 当事者の目を見て、誠心誠意心を込めて質問したり話を引き出したりして相手に負担にならないようなコミュニケーションをとっていた

を引き出し、相手に負担を感じさせないようにコミュニケーションをとっていた》などがあった。

2、「学習の成果を期待する4側面」について

1、で用いた同じカード459枚を使って、「学習の成果を期待する4つの側面」から見てみた。A「知識の側面」が109枚（24%）、B「技術の側面」が16枚（3%）、C「感情の側面」が281枚（61%）、D「価値観の側面」が53枚（12%）であった。

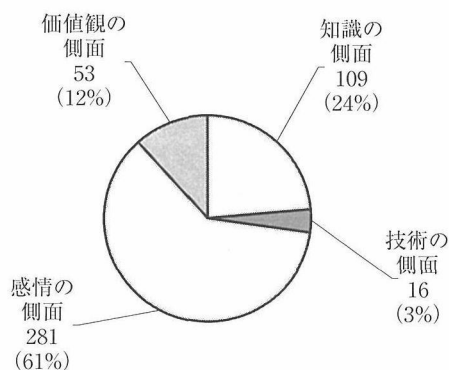


図3 「学習成果が期待される4側面」のカード数と割合
n=459

1) A「知識の側面」について

109枚のカードが『知識の側面』に該当していた。最も多かったのは『サポートシステムの必要性』の35枚である。次いで『自分の病気を受け入れ自律している』の30枚、『精神疾患・障害の理解』の14枚、『自分の当事者へのイメージの変化』が13枚、『看護師の姿

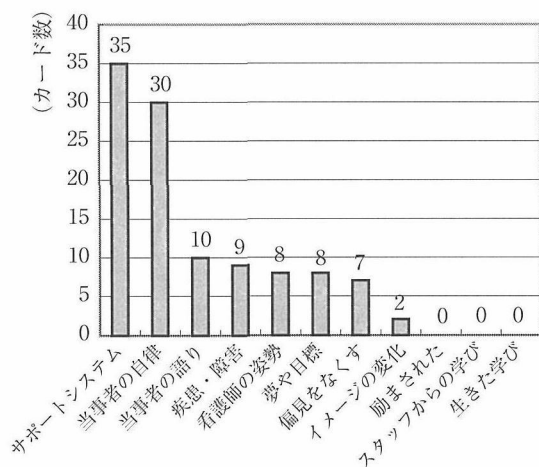


図4 「学習成果が期待される4側面 A 知識」
n=109

のあり方』が10枚の順であった。『励まされた』、『スタッフからの学び』、『生きた学び』には、「知識の側面」についての記述はなかった。

2) B「技術の側面」について

「技術の側面」に該当した16枚のカードの内、最も多かったのは、『看護師の姿勢のあり方』の12枚、次いで『デイケアスタッフからの学び』が7枚、『内的世界を語ることの意義は大きい』の3枚、『当事者への偏見をなくす』の2枚であった。他の7つのサブカテゴリには「技術の側面」に該当する記述はなかった。

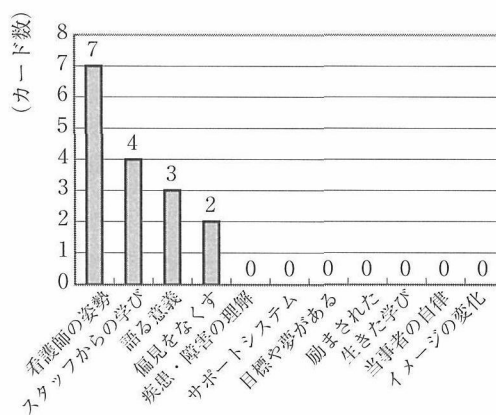


図5 「学習成果が期待される4側面 B技術」
n=16

3) C「感情の側面」について

281枚のカードが「感情の側面」に該当し、全てのサブカテゴリに及んでいた。最も多かったのは『生きた学び』の89枚である。

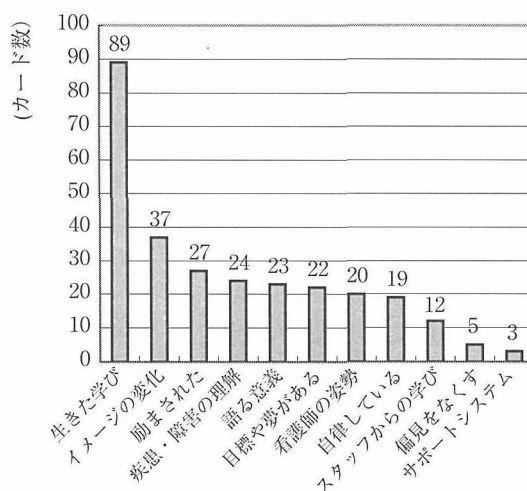


図6 「学習成果が期待される4側面 C感情」
n=281

20枚以上のカードがあったサブカテゴリーを見ると『自分の当事者へのイメージの変化』が37枚、『当事者から励まされた』が27枚、『疾患・障害の理解』が24枚、『内的世界を語ることの意義は大きい』が23枚、『目標や夢があり生き生きしている』が22枚、『看護師の姿勢のありかた』が20枚であった。

4) D「価値観の側面」について

53枚が「価値観の側面」に該当しており、上位5位までを見てみると、最も多かったのは『当事者へのイメージの変化』と『目標や夢があり生き生きしている』の各10枚であり、次いで『看護師の姿勢のありかた』の9枚、『当事者への偏見をなくす』の8枚、『サポートシステムの必要性』の6枚であった。『スタッフからの学び』、『当事者に励まされた』、『生きた学び』には、「価値観の側面」に該当するは記述はなかった。

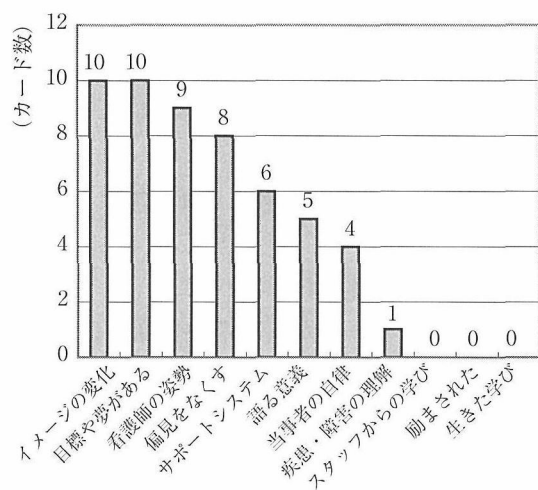


図7 「学習成果が期待される4側面 D価値観」
n = 53

V 考察

1、当事者参加授業において、学生の学びが広がったり深まったりしたことについて、1) その内容と、2) 学習成果が期待できる4側面からみた特徴を、1については、主に課題である「当事者の人間的尊厳（人権）の回復と自律に向けた活動について」の観点から、2については「授業の成果」の点から考察する。

当日は、授業が始まり、他己紹介が活発に行わ

れた後、3人の当事者が自分の病気や生活の体験を一人約15分位ずつ語った。看護学生の授業で話すのは初めてということであったが、堂々としかも積極的に話がされ、学生たちは熱心に聞き入っていた。

1 当事者の人間的尊厳（人権）の回復と自律に向けた活動について

学びの内容から抽出した3つのカテゴリーの内、最も多かったのが「エンパワメント」で、約半数を占めていた。次いで「当事者の自律」が約3割、「支援者側の理解」が約2割という結果であった。当事者の人間的尊厳（人権）の回復と自律に向けた活動は、当事者と社会の人々が相互に理解しあい信頼しあう基盤があってこそ実現することから、この3つの内容が抽出できたことは、課題に対して適切な視点がもてたのではないかと考える。

1) カテゴリーI 「エンパワメント」について

「エンパワメント」が最も多かったのは、サブカテゴリーの『生きた授業』に89名全員の記述がであったことが影響している。《講義では想像の域を出ないことが実際の話しを聞いて更に考える機会になった》ことや《これまでの授業で聞き逃していたことが実はとても大事なことだったことに気づいた》というように、学習が積み上げられるのを実感していたことが推察できる。実際に会った当事者は、自分の辛かった体験も学生の前で積極的に率直に話してくれ、しっかりと現実を目に向けた暮らしをしていことが話された。《人間的な魅力のある人》や、《感動したり、励まされたりすることが多く、勇気をもらい尊敬の気持ちが湧いた》、《看護の道が続けることに迷いがあったが踏みとどまることができた》などからは、援助者として学んでいる学生が、むしろ当事者から励まされ、力づけられる体験をしたことが示されている。また、《社会の偏見や誤解の厳しいなかで病気と戦っている当事者は、自分たちより強い人

だと言う考えに変わった》、《怖い、何もできない人という偏見を持っていた自分を恥ずかしい》、からは、対象者の《歴史的に、精神障害者には人間的尊厳はなく、残虐な扱いを受けてきた》という記述があり、当事者のおかれた厳しい状況に対する認識を深め、当事者へのイメージを一新させ、当事者の辛かった体験にその思いを馳せ共感の気持ちも芽生えたと言える²⁰⁾。

2) カテゴリーⅡ「当事者の自律」について

これまで、精神看護学における対象については、《何をするか分からない怖い人》、《病識が欠如している人》という受けとめ方をしていたため、《そのような人は精神病院に入っていたほうがよい》と思っていたが、今回《このように回復し、社会の中で自律して生活できるということを知った》という記述も少なくなく、学生の認識の変化を見ることができた。病気や疾患について、《当事者は、決して自分の病気を否定せず、冷静に理解し、障害を自分の生活の一部として前向きに受け入れ、病気と仲良く付き合っている》ことを聞くことができています。また、《幻聴が実際にどのようなものであるか聴けた》など、当事者が自分の病気を理解し受け入れていることを学んでいた。特にこれまでの、“統合失調症の患者は“病識がない”とされ、“幻覚や妄想については根掘り葉掘り聴いてはいけない、肯定も否定もしない”²¹⁾という考え方に対して、“当たらず触らずの対応をする”というようなあいまいな認識を持っている学生も少なくなかった。「べてるの家の『非援助論』」²²⁾の中にも「自らの病気を語ることそのものが回復である」と述べられているように、学生もまた当事者が病的体験を語ることの意味、それを聞く側の当事者へのイメージの変化、対応の仕方についての新たな学びを得たと言える。精神科のホームヘルパーの資格に挑戦し、ピアサポートをする目標、サッカーチームを作る夢など、目標や夢に向かって毎日を充実して過ごしている当事者に

パワーと人間的な魅力を感じていた。

3) カテゴリーⅢ『支援者側の理解』について

カード数が全体の2割にとどまったのは、当事者の話を聞いて“再確認できた”という記述が見られたことから、普段から看護を志す者として、そのあり方を学んでいる学生にとって、新たに学ぶこととしては、やや少なかったともいえる。しかし、これまでは、《弱く傷ついている精神障害者を自分が援助しなければならないという一方向の援助を考えていた》が、《患者と看護師という立場にとらわれず、病気をよく知り、一方的に守るのではなく、当事者とも協力し合って何が援助になるのかを考えて心に届く看護がしたい》と述べていることにも注目したい。我々の研究でも「障害者との関係が援助・被援助だけの関係ではないこと、すなわち当事者の自立という観点だけではなく聴取者自らの考え方、関わり方の変化が重要である」²³⁾と報告したこととも一致する。また、長年、保健師活動をしてきた平野氏が「助けるとは、弱り傷ついた者にそうではない者がすること、力あるものがそれより劣るものにする一方向なことと思い込んでいたことが崩された」²⁴⁾とあるように、学生たちが短い授業の時間ではあったが、その考えの一端に気づくことができたことは、きわめて貴重な体験であったといえる。また、《サポートシステムがまだまだ充実しているとはいえない現状があること》や、《個人にあった生活ができるよう看護師は他の職種の人たちと連携をとって進めていかなければならない》というように、自分のこととして取り組んでいかなければならない気持ちを強めてきたこともうかがえる。

2、「学習成果が期待される4側面」について

看護実践教育におけるアウトカムについて設定した4側面については、「感情の側面」の学びが6割を占めており、その殆どが当事者に好意的な気持ちを抱いた記述であった。このような豊かな感情は、当事者への関心が深まり、学習をしてい

く上で自信や前向きの姿勢を育てていくのに欠かせない気持ちである。当事者の具体的な話を聞き、励まされ、当事者へのイメージが変化する体験をした学生は、特に、今後学ぶ臨地実習において誰もが抱く不安な気持ちを軽減することができ、効果的な学習に繋がっていくであろうこと、また、看護観を深めていく上での欠くことのできない基盤になると考える。精神科領域の実習の準備について、事前に具体的な質問に答えるエクササイズに参加した学生と、具体的なでない質問に答えるエクササイズに参加した学生とを比べ具体的な準備を行なった方が実習初日の不安のレベルが低いことが報告されている²⁵⁾ ことも参考にしたい。

「知識の側面」については、全体の24%であったが、講義で学んだことが想像の域を出なかったのに比べ、今回は、当事者のありのままの事実として確認できたことが示されていた。看護実践教育で、理論を実践に応用していく過程では、まず、教室で教師の説話やテキストなどによる知識の習得が不可欠である。さらに、学んだ理論をいかに適応するかを知ることは、臨地での問題解決やクリティカルシンキングなどの知的スキルが関係すると考えられている。その点、当事者授業のなかで病気の症状や、治療、コミュニケーションの特徴など、当事者個々の特定の事実や情報を知ることができ、理論をどのように実際場面に生かしていくのかを知るきっかけにもなったのではないかと考える。「価値観の側面」は、《患者の意思を尊重し、もっと地域社会の人々と語り合う機会を持ち、お互いが分かり合えるようにしたい。そのことが人権の回復に最も近い方法であると考えた》という内容に代表されるように、自分の考えとしてまとめられているものであった。患者の価値観や選択権を尊重して行動するなど、倫理的・人道的な側面についても学習できる機会になったといえる²⁶⁾。「技術の側面」は少ない数値であったが、この学びはこの後行われる精神臨床看護論の講義及び臨地実習のなかに効果的につながっていくことが期待できる。

Ⅵ まとめ

当事者参加授業を実施し、その成果を検討した結果、以下のことが明らかになった。

1、「当事者の人権の回復と自律に向けた活動」についての学生の学びについて

1)「当事者自身の自律」と「支援者側の理解」の双方が不可欠の要素であり、それには、当事者・支援者が共に相手に尊敬の念を持ち、相互信頼の元に発展していく。特に「エンパワメント」が生じる体験は個々の価値観に影響される。

2) 援助者が一方的に当事者を守るのが援助ではない。当事者と援助者は対等であり、双方向性の働きがあって援助となるのであり、援助者であっても当事者から勇気付けられることがある。

2、当事者参加授業における学習の期待できる成果の側面について

1)「感情の側面」の成果が最も期待できる。

実践的で具体的な体験は、今後の臨地実習に向けての準備状況を整え、価値観の形成にもつなげられる効果的な学習方法である。

2)「知識の側面」は、これまでの学習において、想像の域を超えていなかった内容が実感できたことで、より確実なものとして認識されていた。

3)「価値観の側面」については、患者の価値観や選択権を尊重して行動することなど、倫理的・人道的な側面についても学習できる機会になったといえる。

4)「技術の側面」については、教室で行う授業の限界でもあり、今後の臨地実習に有効につながれると考える。

以上のことから、当事者参加授業は、“対象者の視点”から対象を理解すること、及び精神保健福祉活動における看護の役割を考える上で、有効な授業方法であることが示唆され、本授業を精神看護学概論に位置づけることは適切であること判断できる。

今後の課題は、授業に参加することによる当事者側の成果を明らかにすること、他の教授方法の

効果との比較検討を行い、当事者参加授業の有効性の特徴を明確にすることであり、それらは経年的にかつ他領域との連携において進めていくことが望ましい。

謝辞

今回の研究にあたり、協力いただいた看護学生2年生の皆様、授業に参加することを快く引き受けていただいた3人の当事者の皆様、当事者参加授業の実現に向けて多大なご尽力をいただいた小澤精神科医長、角田デイケア室長に心から感謝申し上げます。

付記 この論文の一部は、日本看護学教育学会第13回学術集会（2003. 8 長野市）において発表した。

引用文献・参考文献

- 1) 池邊敏子他：精神障害者の体験談を取り入れた授業からの学び、岐阜県立看護大学紀要 第2巻第1号、p104～110 2002
- 2) 川岸洋美：精神分裂病患者の入院体験から学ぶ看護～当事者の語りを通して～ 富山医科薬科大学看護学会誌 第4巻2号 p137～146 2002
- 3) 加藤伊千夫他：自助グループ・当事者参加による授業の効果についての報告、日本精神科看護技術協会抄録第27回（2002. 岐阜）
- 4) 米澤美貴子：教師と自助グループ・当事者の摂食障害の授業での学生の学びとニーズの実態 ミ授業後のミニレポート・アンケートから一、聖霊学園浜松衛生短期大学紀要 第4号 p38～48 2002
- 5) 中谷千尋、森川三郎、野澤由美、渥美一恵他：精神障害当事者と共に創る授業の効果（その1）、日本看護学教育学会、第13回学術集会抄録集 2003
- 6) 半澤節子：当事者に学ぶ 精神障害者のセルフヘルプグループと専門職の支援 やどかり出版 2001
- 7) 浦河べてるの家：べてるの家の「非」援助論、医学書院、2002
- 8) 向谷地生良他：「べてるの家」に学ぶ、博進堂文庫 20 1999 博進堂
- 9) 谷中輝雄他：社会復帰ということ、やどかり出版、1980
- 10) 森川三郎、中谷千尋、野澤由美、渥美一恵他：精神障害当事者の講演を聞くことによる聴取者の意識の変化「べてるの家」山梨講演会『べてるの家の「非」援助論』を通して、平成14年度山梨県立看護大学短期大学部共同研究費による研究報告書 2003
- 11) 野澤由美、森川三郎、中谷千尋、渥美一恵他：精神障害当事者の講演を聞くことによる看護学生への影響、～「べてるの家」山梨講演会『べてるの家の「非」援助論』を通して 日本病院・地域精神医学抄録集2003・10 島根
- 12) 森川三郎、中谷千尋、野澤由美、渥美一恵他：「べてるの家」講演会前後における精神障害当事者に対する聴取者の意識の変化、日本看護研究学会雑誌、26（3）P 223 2003
- 13) 森川三郎、中谷千尋、野澤由美、渥美一恵他：「精神障害者に対する意識」についての当事者・家族・医療関係者との比較、日本病院・地域精神医学会抄録集 2003・10
- 14) 前掲書 1)
- 15) 前掲書 2)
- 16) 前掲書 3)
- 17) 前掲書 4)
- 18) 前掲書 5)
- 19) キャスリーンB. ゲイバーソン：臨地実習のストラテジー、医学書院、15～29 2002
- 20) 前掲書 5)
- 21) 森温理他：標準看護学講座、精神看護学、金原出版、1997
- 22) 前掲書 7)
- 23) 前掲書 10)
- 24) 前掲書 6)
- 25) 前掲書 19)
- 26) 前掲書 10) ～13)

Success of Lessons Involving People With Psychiatric Disorders: Based on Student Reports After Lessons to Student's Corporal Senses

NAKATANI Chihiro MORIKAWA Saburou NOZAWA Yumi ATSUMI Kazue

ABSTRACT

In basic nursing education, the involvement of people with psychiatric disorders in lessons is a very effective way of developing nursing students' understanding of such patients.¹⁻⁵ The present study was conducted to examine the success and themes of lessons involving people with psychiatric disorders conducted at this college from 2002. We analyzed student reports on the subject of "Restoring Human Dignity(Human Rights) and Activities Aimed at Autonomy in People With Psychiatric Disorders" following lessons involving people with psychiatric disorders to 1) determine how the students' thinking was deepened and broadened, in order to use this information 2) to elucidate the characteristics of learning in relation to knowledge, technology, emotions, and values, the four areas in which learning was expected.

The results showed that 1) there was a deepening and broadening of students' thinking in relation to empowerment (49%), autonomy for people with psychiatric disorders(29%) , and understanding of supporters(22%), and 2) of the four areas in which learning was expected, most learning related to emotions(61%), followed by knowledge (24%), values(12%) , and skill(4%). It can therefore be inferred that the students learned that activities aimed at autonomy for people with psychiatric disorders and a deeper understanding of supporters are important and that it is essential that this be based on feelings of mutual trust and respect. It is of major significance that, in an ordinary lesson, the students were able to have an experience that resulted in empowerment to a limited extent. Furthermore, the fact that emotions accounted for 60% of learning in the four areas in which learning was expected indicates that the students developed greater depth of feeling and that the lectures were also very effective in fostering the way students view people with psychiatric disorders. Although skill was not frequently mentioned, it is expected that students will learn more about this in later clinical psychiatric nursing theory lectures and in clinical practice.

Key words: lessons involving people with psychiatric disorders, empowerment, four areas in which learning is expected